第一章 侍の最期の言葉

託されたもの

午後遅くの日差しが病室を満たし、祖母の顔にやわらかく落ちていた。外山道子は糊のきいた白いシーツの下に横たわり、銀色の髪が枕の上に広がっていた。その声は静かだった。祖母は、何をするにも理由のある人だった。私を呼んだのは、話し相手が欲しかったからではない。私がものを書けるから、呼び寄せたのだ。

私はノートを膝に置き、ペンのキャップを外した。いつかやらなければと、何年も思ってきた。家族の誰も、この話を口にしたことはなかった。それを差し迫った仕事に変えたのは、娘のリンの誕生だった。リンは二歳。いつかあの子は、自分がどこから来たのかを私に尋ねるだろう。そのとき、沈黙で答えたくはなかった。

「これはリンのために書いてちょうだい」祖母は私の目をまっすぐに見て言った。「あなたのたったひとりの子どもなんだから。あの子より前に誰がいたのか、わかるようにしてあげたいの」

私はうなずき、続きを待った。

「人生は、ときにつらいものになる」しばらくして祖母は言った。「でも苦労は、安楽が決して教えてくれないことを教えてくれる。人を強くしてくれる。そして、受け入れさえすれば、人にやさしくもしてくれる」

祖母は息を整えるために言葉を切った。「自分が何者であるかを、他人に決めさせてはいけない。自分の進む方向は、自分で選べるようにならなくては」

部屋はしばらく静まり、祖母はふたたび口をひらいた。「私の名前がなぜ道子というのか、知っている?」

私は首を横に振った。

「『道をひらく子』という意味なの」祖母は片手の指で、宙にゆっくりと文字をなぞった。

道子

「祖父がつけてくれた名前よ。名前は羅針盤のようなもので、その人がなりうる姿を指してくれる――そう信じていた人だった」

それから祖母は、病室のはるか彼方にある場所へ帰っていくかのように、しばし黙り、やがて物語の続きを語りはじめた。

*

祖母の祖父の名は、外山脩造――知る人々には「虎」と呼ばれた男である。二十世紀への変わり目には、明治(1868–1912)の日本を築いた男たちのひとりに数えられるようになる。そのずっと前、彼はただ、最後のサムライのひとりの臨終の言葉を胸に抱えた、地方の野心あふれる少年にすぎなかった。

© 2026 Maki Saito. All rights reserved.

脩造が世を去ったとき、道子はまだ幼かったが、その部屋のことは覚えていた。長年の歩き癖ですり減った畳。年月に黒ずみ、帳簿と巻物に埋もれた机。煙管から立ちのぼる、甘く煙たい煙草の匂い。彼はほとんど口をきかなかった。だが口をひらけば、人々は手を止めて聞き入った。

彼が生まれたのは 1842 年、徳川の世の長岡である。徳川幕府――1603 年に徳川家康が開き、250 年以上にわたって日本を統治した武家政権――の名を冠した時代だった。天皇はなお在位していたが、実権は将軍と、各地の大名たちの手にあった。

脩造は庄屋の長男だった。子どものころから頭の回転が速く、ほかの者が口にしない問いを口にした。なぜ、こうでなければならないのか。なぜ、違っていてはいけないのか。

国は変わりつつあった。十代にさしかかった彼には、それをただ眺めているつもりはなかった。

とはいえ徳川の日本では、社会は厳格に区分されていた。頂点に武士、その下に農民と商人、最底辺に外に置かれた人々。この序列は、法そのものに書き込まれていた。武士は、往来で平民に肩をぶつけられれば、咎めを恐れず刀を抜くことさえ許された。身分の境を越えるのは、大胆というようなものではない。無謀であり、ときに命取りだった。

この秩序のなかで、外山の家は代々、近隣二十六か村を束ねる庄屋を出し、長岡藩に代わって年貢を集め、争いを収め、土地の秩序を保ってきた。敬われる村の差配役ではあっても、武士ではない。あの世界では、その一線がすべてだった。

その役目は、与えられたのと同じたやすさで取り上げられた。1853 年、脩造の父・伝の代に大きな百姓一揆が郡を襲い、外山家は役を解かれ、しばらく屋敷での謹慎を命じられた。土地の記録に残る不名誉である。家の立場がどれほど危ういものか、脩造は身にしみて知りながら育った。

外山家にとって、家名を守り、跡取りを得ることにまさる務めはなかった。家を継ぐべき長男の脩造は、その期待を一身に背負っていた。村の仕事を差配できるだけの学問を身につけ、ゆくゆくは差配役として、夫として、父として身を固める。それ以上は望まれていなかった。

父は、幾世代もの重みを背にした厳しさで言った。「脩造、学問はもう十分だ。これからは庄屋の見習いをせよ。家の近くにいなさい。おまえの居場所はここだ」

だが脩造は、すでにより広い地平を垣間見てしまっていた。彼はむさぼるように書を読み、外の世界から地方へ流れ込んでくる新しい知識の切れはしを集めた。蘭学、漢学、翻訳された医学書、航海術、外国事情。1800 年代の初めから、アメリカやヨーロッパの船は日本の沿岸に迫りはじめていた。1853 年のペリー提督の黒船来航は、脩造がすでに感じ取っていたことを裏書きしたにすぎない。世界は動いている。日本はいつまでも、切り離された島のままではいられない――。

道をひらいた一太刀

© 2026 Maki Saito. All rights reserved.

学問を続けるために江戸――のちの東京――へ出たい。その願いを両親が退けたとき、脩造は家族を仰天させた。刃物をとり、自らの小指を切り落としたのである。

断指として知られるこの行いには武家の先例があり、詫びとも、償いとも、覚悟の証しともなりえた。脩造にとっては、そのすべてだった。両親に許しを乞いながら、江戸へ出るという決意は捨てないと、はっきり示したのだ。この一太刀が彼を、庄屋という踏みならされた道から引きはがし、国家的動乱の渦巻く危険な世界へと押し出した。

血に染まった畳が残した伝言は、見誤りようがなかった。この男の決意は、閉じ込めておけるものではない。

「決断のなかには」と、彼はのちに語っている。「身体だけでなく、運命にも傷痕を残すものがある」

切り落とした指のかたわらに、彼は一通の手紙を残していた。

　江戸で学びたいのです。どうかお察しください。これが、私の誠と覚悟の証しです。

脩造、十六歳。1858 年のことである。

最後のサムライ

脩造が河井継之助(1827–1868)に出会ったのは、この時期である。武士にして学者であるこの人は、彼の生涯で最も大きな影響を与える存在のひとりとなる。

継之助は家臣――主君に生涯の奉公を誓った武士だった。長岡藩の家老として行政と軍略の両方を担い、深い動乱の時代に藩を守る責めを負っていた。だが、崩れゆく幕府への忠義に凝り固まった多くの家臣とは違って、継之助はこの危機に、めずらしいほど実際的に向き合った。徳川の秩序は弱まりつつある。だが、それに代わるものが何になるかは、まだ誰にも言えない。彼はそう見抜いていた。中立は目先の人命を救うかもしれないが、同時に、藩を無防備にさらしかねなかった。

継之助は脩造より十五歳年長で、戦うのと同じ激しさで考える人だった。彼の語る武士道――武人の道――は、向こう見ずな豪胆さではなく、修練の道だった。おのれをどう保つか。何を言わずにおくか。損を承知で、公正に振る舞えるか。敗北は、その何の言い訳にもならない。

継之助はまた、儒学の考えを彼に手ほどきした。人はより大きな善のために動くべきであり、人生の値打ちは富でも名声でもなく、奉仕で測られる、という信念である。人はおのれの生涯がひとつの芸術品であるかのように生きるべきだ、と彼はよく語った。「人間の芸術」と、彼はそれを呼んだ。

長岡で、脩造にそんな話をした人はいなかった。彼はその言葉を六十年、持ちつづけた。

戦略家としての継之助に、時代が与えた持ち札はあまりに少なかった。二世紀あまり、日本の鎖国は封建の秩序を保ってきた。外国の船も宣教師も遠ざけられ、社会は徳川の支配の下で厳格に階層化されたままだった。だが 19 世紀の半ば、潮目は変わる。西洋の海軍が日本の沿岸

© 2026 Maki Saito. All rights reserved.

に現れ、条約と通商を迫りはじめた。徳川幕府にとって外国との通商は、権威のみならず、存立そのものへの脅威だった。

国は、ひとつの問いをめぐって割れはじめていた。日本は、外の世界にどう応じるべきか。天皇への忠誠と外国勢力の排斥を唱える者がいた。生き延びたければ西洋の技術と制度を学ぶほかない、と説く者もいた。

継之助には、事態がどれほど危ういかがわかっていた。古い伝統だけを頼りに、西洋の軍事力から日本を守ることはできない。かといって、節度もなくただ西洋を真似ようとする者たちを信用してもいなかった。長岡の民を守りながら、すでに始まっている変化に彼らを備えさせる。それが彼の課題だった。

指導者に要るのは、党派や受け継いだ制度への忠誠だけではない、と彼は信じていた。中立で無用の死を防げるのなら、他藩の非難を代償にしてでも追求する値打ちがある――。

1868 年、内戦の火蓋が切られたとき、継之助は、長岡は中立を保つべきだと熱をこめて説いた。どちらについても、藩には破壊が、民には苦しみがもたらされる、と。一方には薩摩・長州・土佐の新政府軍が立ち、天皇の権威の回復と近代国家の建設を目指していた。他方には徳川幕府とその同盟者たち――会津はじめ北方の諸藩――が立ち、旧来の秩序を守るために戦っていた。

どちらの側も、中立を長くは許さなかった。新政府軍は長岡を疑いの目で見、幕府方はいっそう強く支援を迫った。両方から挟まれて、長岡藩はついに幕府側との同盟へ引き込まれていく。

二十歳を過ぎたばかりの脩造は、正しかった人間が、それでも敗れていくのを見た。以来、彼が勇気と戦場を混同することは二度となかった。

幕府側に立つと決めたとき、長岡の前にあったのは圧倒的な劣勢だった。薩長土の連合軍は、より大きな兵力と潤沢な物資、そしてイギリスから購った優れた西洋式の武器を持っていた。小さな藩にわずかでも勝ち目を与えるため、継之助は物議を醸す捨て身の決断を下す。長崎の商人から、アメリカ製のガトリング砲を買い入れたのである。

ガトリング砲は、ほんの数年前、アメリカ南北戦争のさなかに発明された世界初の実用的な速射兵器で、一挺で数十挺のマスケット銃に匹敵する火力を放った。兵力で大きく劣る長岡のような小藩には、数少ない頼みの綱だった。だが多くの武士の目に、この購入は深い不名誉と映った。彼らの伝統は長く、武勇を、剣の腕を、戦場での胆力を重んじてきた。舶来の機械に頼ることは、その理想の否定と受け取られた。

継之助の考えは違った。「勇気だけで戦う時代は終わろうとしている」と彼は兵たちに言った。戦のあと、長く長岡に語り継がれた言葉である。「知識と技術で戦わねば、われわれは生き残れない」

その姿を見ながら、脩造は悟った。この争いはもう、ふたつの軍勢のあいだのものではない。ふたつの世紀のあいだのものなのだ。

© 2026 Maki Saito. All rights reserved.

戦火が長岡に達したとき、暴力は容赦を知らなかった。新政府軍の砲が、継之助の本隊の拠る長岡城を打ちすえた。砲声が田をわたって轟き、農民とその家族は逃げまどった。木造の家々が燃え、屋根の上に煙が渦を巻いた。空気は火薬と灰と恐慌で濁っていた。

脩造にとって、その混沌は想像の外だった。彼は、自分の人生を形づくってきた世界そのものが壊されていくのを見ていた。

長岡城の攻防のさなか、マスケット銃の弾が継之助の膝を撃ち、関節を砕いた。彼はもう歩けなかった。砲声と、崩れ落ちる建物の轟音のなか、脩造は駆け寄って血を流す脚に布を押し当て、少数の武士たちとともに彼を町の外へ運び出した。

一行は只見の山中へ逃れた。ぬかるんだ道を越え、冷たい川を渡り、森の奥へ奥へと分け入った。蝉の声が夏の暑気を貫いて響き、ブナの林の土の匂いが漂っていた。ようやく小さな山小屋にたどり着くと、継之助はそこに横たわったまま、動けなくなった。眼下では、まだ戦闘がつづいていた。

只見での教え

継之助が脩造に最後の助言を与えたのは、その只見の山中だった。

「虎よ」と、死の床の彼は言った。「この戦が終わったら、商人になれ。長岡のような小さな場所にとどまるな。蒸気船に乗れ。世界を旅せよ。サムライは、わしとともに死ぬのだ」

継之助とともに、脩造が思い描いていた武士の世界の未来も逝った。年長の男が指し示したのは、新しい方角だった。これからの日本を形づくるのは、別の種類の指導者たち。産業を、交通を、金融を、交易を築ける人間たちだ。国への奉仕は、新しいかたちをとるほかない。

脩造の変化は、ゆっくり訪れた。怒りは消えなかった。怒りは、仕事を見つけたのだ。扉をこじ開けるために指を切り落とした少年は、扉がどう造られているのかを学びはじめた。

*

それを語るとき、道子の声はかすかに震えた。「あれが、祖父の転機だった」と祖母は言った。「山を下りたとき、彼はもう、自分の未来を古いサムライの世界の内側に思い描いてはいなかった。継之助の考えは彼のなかに残りつづけ、やがて彼を東京へ運んでいった。そこで彼は、明治初期を代表する教育者のひとり、福澤諭吉のもとで学んだの」

私は携帯電話を取り出し、その名前を検索した。着物姿で座った男の写真が現れた。眼差しはまっすぐで、どこか疲れている。私は画面を祖母のほうへ向けた。

道子は長いあいだ、それを見つめていた。「これが、あの方の顔だったのね」と、微笑んで言った。「虎は生涯あの方の言葉を抱えて生きたのに、私はその顔を、一度も見たことがなかったわ」

福澤は、1860 年、徳川幕府の遣米使節団に加わった人である。合衆国議会の廊下を歩き、市民が自由にものを言う姿を眺め、女性たちが品位をもって人前を歩くのを見た。封建日本の厳

© 2026 Maki Saito. All rights reserved.

格な序列のなかで育った人間にとって、アメリカで見たものは、生涯あたりまえと思ってきた前提を根こそぎ考え直させるものだった。

福澤は、広い教育改革なくしてこの国は生き残れないと確信して帰国した。来たる時代には、知的にも経済的にも独立していることが欠かせない。そう信じて彼は慶應義塾を興した。のちに日本初の近代的な大学へ育っていく、小さな私塾である。そこで彼は学生たちを、西洋の科学へ、政治へ、経済へ、言語へと向かわせた。日本が未来を築くのに、必ず要る道具だと確信していたからだ。

福澤のもとで、脩造は力というものを別の角度から理解するようになった。それまで彼にとって、強さとはおもに軍務と政治の権威に結びつくものだった。福澤が示したのは、教育も、伝える手段も、制度も、軍隊や政府に劣らず国のかたちを決めうるということだった。

だが、学ぶだけでは足りなかった。脩造は築きたかった。手はじめに第三十二国立銀行の立て直しをみごとにやり遂げ、その手腕を買われて大蔵省に招かれる。そこで彼は、もうひとつの偉大な精神に出会った。日本の近代経済の設計者、渋沢栄一である。

渋沢から脩造が学んだのは、事業は一握りの特権層をほかの皆の犠牲のうえに富ませるためではなく、社会全体を強くするためにある、ということだった。

このふたりを、彼は生涯そばに置きつづけた。ひとりは、自分の頭で考えることを教えてくれた人。もうひとりは、その頭で何を築けばよいかを示してくれた人である。

脩造はついには、国の中央銀行である日本銀行の大阪支店を預かる身となった。だが、それでも足りなかった。日本は、手本にしようとしている工業国のことを、まだあまりに知らなすぎる。彼はそう考えていた。

「書物だけで世界を理解することはできない」と、彼はのちに語っている。「何世紀ものあいだ、日本はほとんど外の世界に閉ざされてきた。私は、自分の目でほかの国々を見たかった」

四十四歳。近代世界を形づくりつつある制度と産業と仕組みを、この目で学びとる。その決意を胸に、彼は日本を離れた。

敷居を越えて

かくして 1887 年の春、彼はサンフランシスコ行きの船に乗り込んだ。旅の手記に、彼は簡潔にこう書いている。

人の言葉からではなく、人の業(わざ)から学ぶときが来た。

他国の民がいかに生き、いかに息づいているかを、この目で見に行く。

「この一節がね」と道子は言った。「いかにも彼らしいの。まっすぐで、飾りがない」

祖母は窓の下の戸棚を指した。畳んだ毛布のあいだに、小さな漆塗りの箱が収まっていた。私はそれを祖母のもとへ運び、蓋を持ち上げた。なかには紐で束ねられた書類の束と、懐中時計ほどの真鍮の羅針盤と、折り目のやわらかくなった汽船の時刻表が入っていた。

道子は紐をほどかないまま、書類の束の上に手を置いた。「あの人の航海が、そっくりこの箱に入っているの」と言った。

© 2026 Maki Saito. All rights reserved.

祖母は少し目を伏せた。「そのころにはもう、西洋についての理屈には興味がなかった。物事が実際にどう動いているのかを見たかったのよ。人がどう暮らし、都市がどう動き、制度がどうやって持ちこたえているのかを」

祖母の手が、私の手を包んだ。「マキ」と静かに言った。「あの旅が、彼を変えたの」

*

脩造が乗ったのは、パシフィック・メール汽船会社の 5,000 トンの汽船シティ・オブ・ペキン号。当時、最大にして最新の部類に入る船だった。鉄の船体、高い帆柱、二本の煙突。脩造は、こんな船を見たことがなかった。これは船ではない、たまたま浮かんでいる町だ——彼は帳面にそう書きつけている。

横浜港を発ったこの太平洋横断には、1,500 人を超える乗客が乗り合わせていた。裕福な者には、ビロードのカーテンと上等な木の調度をそなえた特等室があり、専用の浴室つきの、ヴィクトリア風の食堂があった。それ以外の者たち——脩造はじめ多くの日本人を含む——を待っていたのは、狭い寝棚と長い共用のテーブルである。それでも船上の誰もが、決まった食事の時刻に、混み合う甲板に、足の下の絶え間ない揺れに、身体を合わせていった。

毎朝六時、船の鐘が通路に鳴りわたる。給仕たちがモップや食事の盆を手に足早に行き交い、乗客は手すりにつかまりながら、よろめくように朝の光の中へ出ていく。上甲板では、ウールの外套の男たちと日傘の女たちが、船酔いと退屈しのぎに船の端から端まで歩いた。一等の朝食は、白いリネンの上の卵とパンとコーヒー。夜にはローストビーフとプディングとワインが食堂を満たした。脩造は荷物の奥に、味噌と醤油と干し魚を大事に詰めてきていた。

嵐は苛烈だった。船がうねりに急角度で這い上がり、食堂のテーブルを皿が滑っていくこともあった。潮風は肌を刺し、煙突の煙はあらゆる布にまとわりついた。それでも脩造は、不便を辛抱づよく耐えた。眺め、耳を澄まし、学びながら。夜、船が黒い水を突き進むあいだ、彼は小さな帳面を人の観察で埋めていった。人の気性。乗組員の連携。甲板が傾いでも手を止めない、水夫たちの仕事ぶり。

船で出会う一人ひとり——商人も、水夫も、宣教師も、母親も——それぞれ違う希望と重圧と義理に形づくられているように見えた。脩造は、誰の話にも熱心に耳を傾けた。

アメリカ船の暮らしへの順応は、言葉や習慣を越えて、日々のささいな営みにまで及んだ。畳に敷く布団の代わりに、いま彼が眠るのは、身体の下で沈み、船が揺れるたびにバネの軋む狭いマットレスである。甲板では、お辞儀が握手に、儀礼の微笑みに、西洋式の挨拶の慣れない近さに取って代わられた。英語との格闘は絶えなかった。航海のあいだ、食卓の作法をさらったり、アメリカの日本人社会への紹介状を下書きしたりして過ごす乗客もいた。何年ものちまで彼はこの航海を、西洋の暮らしを書物で読むのではなく、はじめてその中で生きた日々として覚えていた。

動きつづける世界

© 2026 Maki Saito. All rights reserved.

「シティ・オブ・ペキン号がついにサンフランシスコ湾へ入っていったとき」道子は、その光景を味わうように、ゆっくりと言った。「虎は甲板に立って、丘に刻みつけられた都市をじっと見つめていたの」

その港は、脩造が見てきたどんな場所とも違っていた。漁船と低い倉庫の並ぶ穏やかな東京湾にくらべ、サンフランシスコの水際は動きと音で轟いていた。丈高い帆船がひしめき、その脇で鉄の汽船が朝霧へ石炭の煙を吐く。荷役たちが十いくつもの言語で怒鳴り交わす。中国からの木箱、ブラジルからのコーヒー、ニューヨークからの機械。そのすべてが、同じ混み合う波止場を通り抜けていく。江戸の折り目正しい作法のなかで育った男には、騒々しく、混沌として感じられた。

マーケット街を鉄道馬車がガタガタと下っていく。頭上では電信線が柱から柱へ、市中に張りわたされている。山高帽の男たちが、腰当てで膨らんだスカートの女たちとすれ違いざまに駆けていく。石炭と潮風と焼きたてのパンの匂いが、通りで混ざり合う。都市が大きいことは、覚悟のうえだった。これほど速いとは、思っていなかった。鉄道馬車も、商いも、話し声も、群衆そのものも、何ひとつ立ち止まらなかった。

サンフランシスコから、脩造は東部行きの最初の汽車に席を取った。まもなく鉄の車輪が足の下で鳴りはじめ、彼を近代世界の奥へ奥へと運んでいった。

「ユニオン・パシフィック鉄道で一週間よ」道子は微笑んで、私の手を握った。「想像してごらんなさい!」

シエラネヴァダの雪をいただく峰々は、ネヴァダの錆色の砂漠に変わり、ユタのグレートソルト湖の淡いきらめきに変わり、果てのない草の平原へとつづいた。砂漠の静けさ。地平線を黒く染めるバッファローの群れ。さえぎるもののない空。折り重なる山と、海へひらける緑の谷あいに育った男に、アメリカ大陸の途方もなさと異様さは、容易には呑み込めなかった。彼はそのすべてを書きとめた。信じてはもらえまいと思いながら、それでも書きとめる。そんな書き方だった。

ワイオミングとネブラスカでは、寺の山門のようにそびえるビュートを見、若い小麦が波になって平原をわたるのを眺めた。停車駅では、刈り入れを待って並ぶ機械を見てまわった。長い馬の隊列に曳かせる鉄の刈取機。小さな機関車のように控える蒸気脱穀機。仕組みを教わり、日本の村々がひと季節かけて刈り入れる量をこれが一日で集めてしまうと知って、彼は舌を巻いた。これほど大きな機械を見るのは、はじめてだった。

ほとんど唐突に、ひらけた平原が煙と操車場と工場の煙突に取って代わられた。シカゴである。何日もつづいた大草原のあとでは、この都市の大きさそのものが彼を驚かせた。通りは見通せないほど遠くまで一直線に延び、荷馬車と労働者と貨物駅と、動きつづける機械の鳴りひびく工場でひしめいていた。ミシガン湖が、内海のように都市に寄り添っていた。そこから汽車はさらに幾日も東へ走り、彼をニューヨークへ運んでいった。

汽車はハドソン川に行き合い、切り立つ崖と広い水面のあいだを縫うように、川沿いを南へ下っていった。岸辺の煙が濃くなっていく。小さな町々が、工場と倉庫と、ひしめく波止場に

© 2026 Maki Saito. All rights reserved.

変わっていく。南へ進むほど、行き交うものは密になった。川を渡るフェリー。エリー運河沿いに艀を曳くタグボート。隣の線路を走る貨物列車。

都市に入る前から、脩造にはもう、その大きさが肌で感じられた。ポーターの声が通路に響き、前方の操車場で信号が鳴り、機関車が速度を落とすにつれて、プラットホームが次々と窓を滑り過ぎていく。やがて蒸気の音がして、連結器の締まる衝撃が来て、どこか前方で声がした。「グランド・セントラル!」

客室の扉が鋭く叩かれた。外で金属の踏み段が開かれる。冷たい朝の空気が、石炭の煙と湿った石と、近くの川の匂いを運んで流れ込んできた。脩造は荷物をまとめ、ほかの乗客につづいて、駅へ通じる広い傾斜路に降り立った。

傾斜路は、グランド・セントラル・デポの大トレインシェッドへ通じていた。なかに入って、彼は頭上を仰いだ。鉄とガラスのアーチ屋根が、長年の煙と蒸気で黒ずんだまま、プラットホームの百フィート上にかかり、六百フィート以上も先までつづいている。足音が床にこだまし、手荷物のカートが人ごみを鳴りながら抜けていき、着いたばかりの乗客は、親類を、ホテルの看板を、乗り継ぎの汽車を探している。脩造はしばし足を止めて、あたりを見まわした。シェッドの先の駅舎は、乗り入れる三つの鉄道会社が分け合い、それぞれに待合室と切符売場を構えていた。ひとつの駅というより、ひとつ屋根の下の三つの駅である。ひとつの建物に集められたこれほどの動きを前にして、日本で見てきた何ものも、彼の備えにはなっていなかった。

道子のやわらかな声が、子どものころに聞いた話を語り直した。「虎はグランド・セントラルを、『動きというものを讃えるために建てられた神殿』だと言っていたわ。鉄とガラスのアーチ屋根の下にこだまする足音、発着する列車のあわただしさ。そして『時間そのものが呼吸しているような場所だった』とも」

駅の外でも、都市は休みなく動いているように見えた。電灯の下を馬車がガタガタと走り、新聞売りの少年が街角から見出しを叫ぶ。大通りでは、聞き分けられない言語が耳をかすめ、日本では見たこともない顔立ちの人々とすれ違った。

セントラル・パークでは、移民の家族たちが遊歩道と芝生に詰めかけるのを眺めた。イタリア人、アイルランド人、ユダヤ人、中国人。どの集団も、それぞれの習慣と衣服と言葉を携えている。それでいて彼らは、屈託なく公園を分かち合っていた。その光景は、彼の不意を打った。

「虎にとってはね」と道子は言った。「階級も国籍も違う人たちがあんなに自由に交わるのを見たのは、あれがはじめてだったの」

日本では、身分と義理が、人と人のほとんどすべての関わりを決めていた。ここでは、少なくとも見たかぎり、商人も労働者も実業家も、彼が見たこともない自由さで同じ通りを行き交っていた。この経験は、ニューヨークを去ったあとも長く彼のなかに残った。

つづく日々で彼を捉えて離さなかったのは、いわば都市の配管だった。都市をただ動かしつづけるためだけに、これほどのものが築かれている。高架鉄道が、煉瓦造りの建物の列のあいだを頭上で轟いていく。目を向けるところすべてに、建設と産業のしるしがあった。鉄道線

© 2026 Maki Saito. All rights reserved.

路、倉庫、電信柱、鉄橋、電灯。木の建築のなかで育った男には、鉄とコンクリートの建物そのものが巨大に見えた。通りは石で舗装され、縁石で縁取られている。頭上には電線が柱から柱へ延び、その下では辻馬車と物売りと労働者と歩行者が、夜遅くまで、照らし出された大通りにひしめいていた。

脩造の目に、ニューヨークの多くは、日本の何よりも幾年も先を行っていた。ときに彼は、ただ観察するためだけに足を止めた。舗装された大通り。明かりのともる商店の飾り窓。風にびくともしない建物のあいだにこだまする声。

ロウアー・マンハッタンでは、トマス・エジソンが 1882 年に開いた発電所、パール・ストリート発電所を訪ねた。ガラスの仕切りの向こうでダイナモがうなり、技師たちが機械を見張っていた。通りの下には敷かれたばかりの電線が走り、ついこのあいだまでガス灯に頼っていた街区へ、電気を送り込んでいた。

数日後、セントラル・パーク近くの博覧会で、彼は短い軌道を静かに走る電気鉄道の模型を見た。何より驚いたのは、煙がないことだった。小さな機関車は、彼が汽車の旅に結びつけてきた蒸気の唸りも轟音もなしに、滑るように進んでいく。彼は立ったまま、機関車が軌道を回りつづけるのを何度も見つめ、これほど静かな力がどうやって機械をこれほど滑らかに動かすのかを、理解しようとした。

道子は、かたわらのテーブルの小さな手帳へ手を伸ばした。「その瞬間のことを、彼は書き残しているの」と、黄ばんだページを大事そうにめくりながら、静かに言った。

ニューヨーク滞在中、電気の仕組みを解しかねて苦しんでいた折、
セントラル・パークにて電気鉄道の模型を見たり。深く心を打たれたり。
「これは」と思えり。「いつの日か、必ず日本の役に立つ」と。

その実演は、日本へ帰ってからも長く彼のなかに残った。何年ものち、阪神電気鉄道の創立に加わったとき、彼はアメリカで出会った着想に立ち返っている。とりわけ、大阪と神戸のまわりに育ちつつある町々へ、ふつうの人々を速く確実に運ぶ電気鉄道の可能性に。

1905 年に開業した阪神電鉄の列車は、学生を、労働者を、商人を、勤め人を、ひとつの車両に乗せてふたつの都市のあいだを走った。脩造は、機械そのものにはさして興味がなかった。興味があったのは、その上を運ばれていくもののほうだった。人、品物、そして、別の人生の可能性。

私は微笑み、思わず口に出していた。「それがぜんぶ、虎がマンハッタンの高架線路を見上げたところから始まったのね」

道子はうなずいた。「私は 1955 年に、ニューヨークに最後まで残っていた高架鉄道に乗ったことがあるのよ。とうに電化されたあとだったけれど。窓の外を眺めていたらね、一瞬、彼の目で世界を見ているような気がしたの」祖母はそこで言葉を切り、息を集めた。「マキ……それはまだ、ほんの始まりだった。虎はニューヨークで止まらなかったのよ!」

ニューヨークの先には、ヨーロッパがあった。脩造はフランス行きの大西洋横断汽船ラ・ブルターニュ号に船室を取った。出航までの数日、アメリカで集めた覚え書きと写生と小冊子を、注意深くトランクに詰めた。夜になると、旅の場面が繰り返しよみがえった。ひしめく通

© 2026 Maki Saito. All rights reserved.

り、電気の明かり、機械、都市そのものの音。アメリカの大きさはなお彼を驚かせつづけていたが、関心はすでにふたたび東へ、パリへと向かいはじめていた。

ハドソン河岸のフレンチ・ラインの埠頭から、彼は当代の大西洋航路を代表する汽船のひとつ、ラ・ブルターニュ号に乗り込んだ。埠頭にはカモメの声と怒号のような指図が鳴りわたり、船腹を叩く水の音が響いていた。船がハドソン川からアッパー・ベイへ滑り出ていくとき、脩造はニューヨークを最後にひと目見ようと甲板へ上がった。

そのとき、港の上にそびえる自由の女神が見えた。据えられてまだ日が浅く、銅の肌が午後の日差しに赤銅色に光っている。像は片腕を空へ掲げて立ち、足元を船がゆっくりと過ぎていった。脩造には、その眺めがひとつの皮肉を帯びて見えた。ヨーロッパへ発つ彼にアメリカが最後に差し出した映像が、フランスの築いた記念碑だったのだから。

港が背後に広がり、像が靄のなかへ遠ざかっていくあいだ、彼は手すりを離れなかった。そこから彼は、大西洋を渡った。

さらに一週間の海ののち、脩造がパリに着いたとき、都市は 1889 年の万国博覧会の支度のさなかにあった。シャン・ド・マルスのそこかしこを工事現場が囲み、その上では、未完成のエッフェル塔がすでに空の輪郭を支配していた。剥き出しの鉄骨は、脩造が見てきたどんな建造物よりも高く昇っていた。

パリは、ニューヨークとは違うかたちで彼を打った。歩みはゆるやかなのに、通りも、橋も、庭園も、公共の建物も、工学と近代産業への同じ自信を語っている。ただここでは、新しい建設までもが、釣り合いと意匠をめぐる、より古い伝統に形づくられているように見えた。「夜の大通りは、明るく照らされていてね」と道子は言った。「カフェは夜が更けても混み合っていて、どこへ行っても、人々が政治や芸術や社会のことを熱っぽく語り合っていた」祖母はかすかに微笑んだ。「虎はそれが大好きだった。耳に入るものすべてを呑み込もうとして、ひたすら歩きまわったのよ」

それからドイツである。ベルリンで、脩造は巨大なビール工場を見学した。銅の釜が蒸気を噴いてうなり、瓶詰めの機械が見事な速さと正確さで動く。だが気がつけば、機械と同じくらい、働く人々と客たちのほうを見ていた。

「その工場のビヤホールでね」と道子は説明した。「彼は、労働者と学者と商人とが、長い木のテーブルに寄り合うのを眺めていたの。ただ飲んでいるのではなかった。語らって、笑って、時間をともに過ごしていたのよ」

そのテーブルでは、日本でなら決して同席しなかったはずの男たちが、対等に語り合っていた。脩造はそれをひと晩眺めて、理解した。醸造所がつくっているのは、ビールだけではないのだ。

*

だが 1888 年に帰り着いた故国は、別の国になりつつあった。もっとも、その変化の多くは、内から育ったというより、外から持ち込まれたもののように見えた。明治維新は変化をもたらしたが、それは世界中からの影響の継ぎはぎだった。都市では男たちが山高帽をかぶり、電信

© 2026 Maki Saito. All rights reserved.

柱の下を歩いている。巡査はヨーロッパ式の制服を着ている。郵便は、赤いイギリス式の円柱ポストに集められる。だが田舎では、ほとんど何も変わっていなかった。農民は変わらず田に腰をかがめ、商人は算盤で値を弾き、汽車どころか外国人さえ見たことのない村人が大勢いた。

「日本は急速に近代化していたけれど」と道子は私に言った。「虎には、その多くがまだちぐはぐに見えたの。西洋の服、西洋の建物、西洋の機械。ほとんど一夜にして現れたようなものばかり。でも彼は、技術を輸入するのはやさしいほうだと考えていた。大事なのは、人々がそれを規律と目的をもって使いこなせるかどうかだ、と」

かつての武士のなかには、日本を形づくってきた伝統が失われるのを恐れて、西洋の影響に抗う者もいた。だが脩造には、別の可能性が見えていた。師の継之助が生きてみせた義務の感覚は、古い秩序と一緒に消えなくてもよい。国への奉仕は、いまや別のかたちをとれる。軍務だけではない。鉄道を、産業を、金融を、公共の事業を築くこともまた奉仕なのだ。時とともに脩造は、武士に求められた規律と責任は、産業の時代にあってもなお日本に仕えうるのだと、信じるようになっていった。

「1888 年に彼が持ち帰ったのは、覚え書きと写生だけではなかったの」と道子は言った。「近代の技術と、経済の発展と、公共への投資とが、人の日々の暮らしをどう形づくりうるか。その新しい理解を持ち帰ったのよ」

奉仕としての実業

脩造は、近代の産業が都市の暮らしをどうつくり変えるかを、その目で見てきた。帰り着いた日本は、近代化が実際に何を意味するのかを、まだ模索していた。彼は異国で学んだことを試したくてうずうずしていた。その最初の大きな事業は、多くの人を驚かせた。醸造所である。銀行家がビール商売に乗り出すとは、軽薄だ、いや不謹慎だとさえ見る者もいた。

だが、ベルリンで得たあの教訓が、彼に確信させていた。醸造所は、見かけほど奇妙な選択ではない。ビールは、その一部でしかなかった。彼が同じくらい心を寄せていたのは、人が寄り合える場所をつくることだった。

脩造はドイツの醸造法と機械を輸入し、日本に合うようつくり替えた。彼の築いた会社は、やがてアサヒビールとなる。土地の人を雇い、安定した賃金を重んじ、醸造所のまわりに清潔で人を迎え入れる場が生まれるよう心を砕いた。機械は、国が輸入できる部分である。残り――習慣も、信頼も、人がそこへ足を運ぶ理由も――は、その土地で育てるほかなかった。

「それがね」と道子は言った。「虎が、古いサムライの奉仕の心を近代へ持ち込んだやり方だったの」

だが脩造は、そこで止まらなかった。日本の銀行制度は、いまだに働く人々を締め出していた。銀行の多くは商人と地主のためのもので、ふつうの労働者には、蓄えを安全に置く場所も、金を借りる道も、境遇を良くする望みも、ほとんどなかった。そこで彼は、ひとつの簡明

© 2026 Maki Saito. All rights reserved.

な考えを軸に、大阪貯蓄銀行の設立に力を貸した。小さな預金にも価値がある。働く人々にも、ほかの誰とも同じように、暮らしの安定に手が届いてよいはずだ。

「自分の暮らしは、質素なままだったのよ」と祖母は言い添えた。「大きな屋敷に住んではいたけれど、贅沢を避けていた。誰にでも、こう言っていたわ。『自分が殿様のように暮らしていて、どうして人に倹約を説けるか』って」

醸造と銀行のあとで脩造が向かったのは、目に見えないが欠かせないものだった。見知らぬ者どうしが恐れずに商いできる、信用の仕組みである。「1892 年にね」と道子は言った。「彼は日本で最初の興信所を創ったの。言葉まで自分でこしらえたのよ」

興信

「『信を興す』という意味よ」

ロンドンで見たものに触発されて、脩造は考えていた。日本には、商いの相手を見きわめる、もっと確かな方法が要る。血縁や付き合いではなく、評判と、確かさと、金銭の行状で。金を貸す前に、判を押す前に、会社には信ずるに足る情報が要るのだ。

だが人々は憤慨した。人の身辺を――財産を、家族を、果ては日々の癖までを――調べるとは、私事と体面を踏みにじる許しがたい振る舞いだ、というのである。「他人の内情を詮索するなど、われわれのすることではない。西洋人のやることだ。こちらには面目というものがある」。最初の報告書が出まわったときには、刀を提げて脩造の事務所へ押しかける商人さえいた。

だが脩造は、口の巧い男が正直な貸し手を欺くのを、あまりに多く見てきた。人柄を見定める、もっと確かな方法が欲しかった。そこで若い調査員を自ら選んで鍛え、丹念に、静かに、依怙贔屓なしに働くことを求めた。「おまえたちの報告は、人の生計を左右するかもしれない」と彼は言った。「だから正確であれ。公正であれ」

旅の商人に身をやつし、酒屋に入り込んで帳簿を検める者がいた。湯屋や茶屋で、ときには芸者の話に、静かに耳を澄ます者もいた。遊びのためではない。隠れた借金や不身持ちの囁きを拾うためである。

道子はくすくすと笑った。「ある調査員の報告にはこう書いてあったの。『主人は深酒、帳簿は放置、女房は博打好き』。三文小説を読んでいるようでしょう――でも、ぜんぶ本当のことだったのよ」

師の渋沢までもが感心し、間を置かずに東京へ同様の機関を開いたほどだった。物議を醸す思いつきとして始まったものは、時を経て、日本の近代的な信用制度を形づくる一助となった。それもまた、個人の恩顧と受け継がれた信用という古い仕組みを、より広く、よりむらのないものに置き換える試みだった。

「彼はただ銀行を建てたんじゃないの」と道子は静かに言った。「見知らぬ者どうしが商いで信じ合える。その仕組みをつくる手伝いをしたのよ」

それから脩造は、近代の日本にいちばん欠けていると信じるものへ向かった。動きやすさである。1899 年、彼は阪神電気鉄道の創立に加わり、育ちゆく都市大阪と港町神戸を、三十二キロの路線で結んだ。

© 2026 Maki Saito. All rights reserved.

醸造所と同じく、この鉄道も、ふつうの人が日々使うためのものだった。人々は大阪湾岸に沿って、勤め先へ、学校へ、家族のもとへ、ずっとたやすく行き来できるようになった。かつてまる一日がかりだった道のりが、一時間足らずになった。脩造にとって、鉄道の用とは、それがすべてだった。

出資者たちに、彼はこう語った。「国家は身体のようなものだ。その健康は、めぐりにかかっている」

彼が言ったのは、文字どおりの動きである。人が行き交い、物が運ばれ、都市と都市が鉄道と交易で結ばれる。人がつながりつづけるとき、国は強く、変化に耐えるものになる。古い社会の境界のなかに孤立したままなら、歩みは鈍る。サムライの奉仕の理想は、近代の日本にもまだ生きていた。ただしそれはもう、商業に、交通に、公共の暮らしに宿るのだった。

*

1904 年の日露戦争で、日本は、自分たちがどれほど輸入物資に頼っているかを痛感させられた。とりわけ、製鋼に使う精製された石炭、イギリス産のコークスである。コークスは、国の艦船と鉄道と兵器を支える炉の燃料だった。脩造にとって、これは経済の問題である以上に、戦略の問題だった。外国の補給線に頼りすぎる国は、戦時にたやすく急所をさらす。

そこで彼は、コークスを国内で生産して外国の供給に頼らずにすむよう、大阪化学工業――今日の大阪ガス――を興した。一つの工場として始まったものは、ほどなく工場の網へ広がり、鋳物工場へ、鉄道へ、造船所へと燃料を送り込んでいった。近代の工業国は、燃料と原料のすべてを輸入には頼れない。西洋列強と伍していくなら、日本にはみずからを賄う力が要る。脩造はそう見きわめていた。

手本は、見てきていた。アメリカの製鋼所。ドイツの規律ある産業の仕組み。フランスの野心にみちた土木事業。どの国も、急速な成長を支えるに足る強い網の目を築き上げていた。国際社会で競うなら、日本にも同じ産業の土台が要る、と彼は信じた。

だが、工場だけでは足りない。品物は、確実に蓄えられ、運ばれ、届けられなければならない。そこで彼は倉庫へ、航路へ、内陸の流通の仕組みへと目を向けた。商いを動かしつづける、実際の構造へ。

*

私は精いっぱいの速さでノートに書きつけていたが、道子の声は、そのたびに私を物語のなかへ引き戻した。

「世紀が変わるころにはね」と祖母は言った。「虎は、新しい日本の、目に見えない足場を組み上げる手伝いをしていたの」

鉄道と、醸造所と、銀行と、化学工場。それは、同じひとつの考えの、四つのかたちだった。近代の国とは、人と物と金と情報が、どこにも堰き止められずに動けるようにした仕組みの束であり、四つのどれひとつ、ほかの三つなしには築けない。工場が変えるのは、経済だけ

© 2026 Maki Saito. All rights reserved.

ではない。人がどこに住み、一日を何に使い、自分に何ができると信じるか。それを変えるのだ。

機械を学ぶつもりで海を渡り、その一年の大半を、人間を眺めて過ごした。人がどう暮らすか。どう寄り合うか。足元の地面が動いたとき、どうするか。

何年ものちに祖母は、その仕事を私なりのやり方で継いでほしいと、私に頼むことになる。

静かな威厳

「マキ」と祖母は言った。「脩造は声の大きい人ではなかった。大演説などしなかった。会議では、聞いていたの。みんなが言いたいだけ言ってしまうまで。そして部屋が静まると、自分の考えを述べた。いつも明快で、いつもそれが結論だった。無駄というものを嫌った人でね」

祖母は彼の日記の、自らを律する言葉が並ぶページをひらき、いくつかを私に読み上げてくれた。

言葉の無駄。時間の無駄。

辞儀は、敬意を示すに足るだけ深く。されど、動くべき時を逸するほど長くはせぬこと。

その同じ効率を、彼は家庭にも持ち込んだ。一家が住んでいたのは、大阪の中心、中之島の広壮な屋敷である。手入れの行き届いた庭と木の廊下が、半エーカー近くもつづく。だが脩造自身は、客間ひとつ――畳十枚、つつましい書斎ほどの広さ――に起き伏しした。その実際主義は、ときに容赦がなかった。着物の長い袖は無駄だ、いっそ切り落としてしまえと言い出して、家族を大いに狼狽させたこともある。

彼は夜遅くまで働き、いつ何時でも来客に会った。助言を求めてくる同僚にも、出資者にも、近隣の人にも、惜しみなく時間を与えた。家で過ごすのは月に数日きりで、そのときでさえ、家族の集まる居間には行かず、たいてい自分の小さな部屋にこもっていた。

感情を表に出す人ではなかった。声を荒らげることはめったになく、自分の気持ちを長く語ることもほとんどなかったと、家族は記憶している。だが、人のことはよく見ていた。彼の贈り物は慎重に選ばれていて、ふと気にとめ、覚えていた小さな何かを映していることが多かった。そこにいるというだけで、まわりの振る舞いが変わる。そういう人だった。

政治にも、彼は商いとほぼ同じやり方で臨んだ。のちに選挙に立ち、ごく限られた納税者しか選挙権を持たなかった時代に、三百五十六票を得て衆議院議員に選ばれたときも、個人攻撃や芝居がかった演説で票を集めはしなかった。交通、産業、銀行、公共の基盤。政府が手を貸して解決すべきだと彼が信じる実際的な問題を、まっすぐに語った。

ともに働いた人々は、しばしばその胆の据わりようを語った。注意深く耳を傾け、公の場での争いを避ける。若き日に河井継之助に敬慕した、あの資質である。ある集会では、酔った政敵が刃物を突きつけたことさえあった。脩造は動じなかった。話しつづけ、演説を最後まで終えた。男はのちに恥じ入り、しまいには、その男ばかりか家族まで、自分に投票するよう口説き落としてしまった。

© 2026 Maki Saito. All rights reserved.

外からは、冷たい人に見えることもあった。へつらわず、見栄や愛想に付き合う気がなかったからである。だが近しい人々は、その寡黙が冷酷さではなく、習慣と修練から来ていることを知っていた。

どれほど多忙でも、毎日、同じ小さな日課に帰った。夕暮れの燗酒一杯。碁を一局。線が得心のいくまでの書の稽古。家で静かに喫む茶。

心を捉えたものには、我を忘れて没頭した。あるときなど、友人の葬儀の最中に碁に夢中になり、式をそっくり欠席してしまった。この集中の強さを、彼はすることのすべてに持ち込んだ。

数ある事業のなかで、彼が最後まで最も近くに置いたのは、大阪貯蓄銀行だった。ふつうに働く人々が金を蓄え、自分と家族の暮らしの土台を築いていくための、あの命綱である。

だから彼が世を去ったとき、驚くことが起きた。阪神電鉄が、まる一日、すべての列車を止めたのである。軍の英雄のためでも、皇族のためでもない。その線路を敷く手伝いをした、ひとりの男のために。

*

「私が小さかったころ」道子の声がやわらいだ。「父がよく話してくれたの。虎じいさまは夜遅くに帰ってくると、提灯を手に、屋敷の廊下をゆっくり歩いてね。子どもたちの部屋の襖を、ひとつずつ、そっと細めに開けて覗くの。何も言わずに、ただ顔を見て、次の部屋へ。それが、あの人の愛情の示し方だった。

「私がごく幼いころには、抱き上げて『どれ、どのくらい重くなったか見てやろう』と言ってくれたわ。小さなことだけれど、いまでも覚えているの」

祖母はかすかに微笑んだ。

「いつも何かを築いている人だった――鉄道、銀行、会社、家族のための家。自分の家を建てる前に、両親の家を直した人よ。物事がきちんと働いて、自分がいなくなったあとも長持ちするように、いつも整えておく人だった」

道子は少しのあいだ、私の向こうへ目をやってから、また口をひらいた。「あの人は生涯をかけて、ほかの人たちが自分の力でより良い暮らしを築けるように、その道を楽にしてあげていたのよ」

脩造は、勲章や賞状や公の栄誉で成功を飾ることには、ついぞ関心がなかった。彼の残したものは、彼を覚えている人々のなかに生きた。そして祖母の語りを聞きながら、私は気づいた。祖母は、一族の伝説を諳んじているのではない。死んだあとも長く、自分の人生のなかに居つづけたひとりの人のことを、語っているのだ。

祖母は枕元のテーブルへ手を伸ばし、小さな、使い込まれた写真を取り上げた。脩造――虎――が、黒っぽい上着姿で、まっすぐにカメラを見据え、口を一文字に結んでいる。祖母はそれをしばらく手に持ってから、私の手のひらに置いた。

「これはね」と祖母は言った。「家族のアルバムに入れるものじゃないの。リンのためのもの。あの子にその用意ができたら、渡してあげて」

© 2026 Maki Saito. All rights reserved.

リンのために。私はセピア色の写真を見下ろした。縁は、長年手から手へ渡るうちに、やわらかくすり切れていた。長岡から大阪へ、日本からアメリカへ。戦争と喪失と再建の数十年をくぐり抜けて、いま、東京の、この静かな病室へ。

「あの人は、大きな財産を残したわ」と道子は言った。「でも、私のなかに残ったのはそれではないの。私が覚えているのは、あの人の生き方よ」

祖母はしばらく黙っていた。「懸命に働いて、それでいて、かたくなにならなかった。人に多くを求めたけれど、自分にはもっと多くを求めた。そして、そのどれについても、礼を言われることを必要としなかった」

私はその言葉をノートに書きつけた。覚えておくためではない。いつかリンがこの言葉を欲しがる齢になったとき、まだちゃんとそこにあるように。

「若いころのあの人は」と祖母はつぶやいた。「定められた人生から抜け出しさえすれば、それで足りると思っていた。でもすぐに知ることになるの。出ていくことは、やさしいほうの半分にすぎないって」

祖母は、私の手の中の写真を指さした。「あの人はサムライの古い世界を捨てて、残りの生涯を、近代の日本を築く手伝いに捧げた。銀行、鉄道、会社――ふつうの人が実際に使える制度をね」

声がやわらいだ。「私はあの人の財産は何ひとつ受け継がなかった。でも、あの人の生き方から学んだもののほうが、結局はずっと値打ちがあった。勇気よ。あの人の生きる姿を見て、私はそれを学んだの。それがなかったら、私自身、フランスへ海を渡ることなど決してなかったかもしれない」

声はさらに静かになった。「リンは、ふたつの世界のあいだで育つことになる」。まるで二歳の曾孫娘にじかに語りかけるような声だった。「それはいつも楽なことではないでしょう。でもあの子は、海を渡り、物事を築き、先の見えない道でも歩きつづけた人たちの血を引いているの」

祖母はひと息休んでから、つづけた。「この家の者はどの代も、自分の進む道を自分で見つけなければならなかった。虎はそれを『道をひらくこと(ウェイメイキング)』と呼んでいたわ」

かすかな微笑みが、祖母の顔をよぎった。「そして今度は、リンの番よ」

*

病室の窓の外で、日はすでに沈んでいた。残照が空を深い藍に染めていた。裸の枝はもう風に動かず、薄れゆく青を背に、筆の線のように繊細な、角ばった影となって立っていた。

長いあいだ、部屋に聞こえるのは、祖母の呼吸の音だけだった。

祖母は一時間あまりも語りつづけ、幾世代にもわたる記憶のなかを渡り歩いていた。長岡、大阪、パリ、戦争、鉄道、音楽、旅立ち、帰郷。聞きながら私は、もう遠い歴史を聞いているという気がしなかった。これは、私が生まれるずっと前に私の家族を形づくった、人々の生そのものだった。

© 2026 Maki Saito. All rights reserved.

やがて、半ば閉じられた祖母の目が、私のほうを向いた。「これでわかったでしょう、マキ」と祖母は静かに言った。「私たちは誰も、白紙から始めるのではないの。考え方も、暮らし方も、苦しみ方さえも、受け継いで始める。大事なのは、それをどう使うかよ」

私はゆっくりとノートを閉じた。一瞬、祖母は言いたいことの終わりまでたどり着いたように見えた。だが、ひと呼吸おいて、祖母はつづけた。「あなたの歳のころ、私は虎の強さに憧れていたけれど、その裏にある律しの深さまでは、よくわかっていなかった。野心も、精力も、押し出しの強さも見えていた。ずっとあとになってやっとわかったのは、あの人がどれほど注意深く自分を制御していたかということ。あの制御がなければ、ああいう人は、たやすく壊す側の人間になっていたでしょうね」

祖母は目を遠くへやった。天井ではなく、部屋のはるか向こうのどこかへ。私には、祖母が何年も前の自分自身を見ているような気がした。夫を亡くし、異国に暮らし、働きながら、作曲をつづけながら、家族を育てようとしていたころの自分を。

祖母は、深く息を吸った。「《大和の声》を書いたとき、私は古代の日本のことを書いているつもりだった」と祖母は言った。「いまは、あの人のことを書いていたんだと思う。虎になった少年のこと。長岡を出て、歩きつづけた人のことを」

私は幼いリンのことを思った。目にとまったものへ、いつも両手を伸ばしている子だ。

道子は、私の手の中の写真を指した。「それは、あの子のものよ」

私はうなずき、写真をノートに挟んだ。

*

その夜、家に帰ってからも、私は長いこと机に向かっていた。窓の外の木々はまだ裸のままだったが、空気は変わりはじめていた。春が近かった。私はノートをひらき、道子の言葉を丁寧に書き写した。それから、ページの一番上に表題を書いた。

リンへ

あなたは、ひとつではない歴史のなかに生まれてきました。あなたの家族の一部は日本から来て、もう一部はアメリカで暮らしを築きました。それが何を意味するのかは、いつかあなたが自分で決めなくてはなりません。

あなたの曾祖母は、どの世代も自分の進む道を自分で見つけなければならない、と信じていました。虎は、別の人生を築くために山と海とを越えました。道子も海を渡りました。そして自分なりのやり方で、彼の始めたことをつづけようとしたのです。

あなたの番が来たとき、注意深く、正直に、恐れずに、自分の道をひらく勇気があなたにありますように。

そして、どうか忘れないでください。あなたは、ひとりで始まったのではないことを。

私は筆を止めた。家のなかが静まり返っていた。気がつくと私は、この夜、道子が私を連れて渡ってくれた場所のことを考えていた。只見、大阪、ニューヨーク、パリ。それらすべての

© 2026 Maki Saito. All rights reserved.

生が、めぐりめぐってリンへたどり着いたことの不思議を。物語はもう、自分の人生と別のものではなかった。私たちみんなのものだった。

翌朝、私は写真を封筒に納めた。表には、ひとことだけ書いた。リンへ。

いつ渡すことになるのかは、わからない。もっと大きくなったときかもしれないし、あの子が自分の問いを口にしはじめたときかもしれない。さしあたり私は、それを机の抽斗に大切にしまった。それは家宝のようには感じられなかった。しかるべき時まで運ぶようにと託された、何かのように感じられた。

© 2026 Maki Saito. All rights reserved.

© 2026 Maki Saito. All rights reserved.